



| | |
|--------------|---|
| Title | HardyのWessex小説における伝達節とキャラクターライゼーション |
| Author(s) | Cao, Fanghui |
| Citation | 言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 69-84 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/102222 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Hardy の Wessex 小説における伝達節と キャラクターライゼーション

曹 芳慧

大阪大学大学院人文学研究科

〒 560-0043 豊中市待兼山町 1-8

E-mail: u327503a@ecs.osaka-u.ac.jp

あらまし 本稿では、19 世紀イギリスの作家 Thomas Hardy の Wessex 小説における「伝達節」に注目し、その機能および人物造形への寄与を明らかにすることを目的とする。小説における会話は物語の進行を助け、登場人物の性格や心理を描写する重要な手法であり、特に長編小説では地の文のみでは伝わりにくい情報を補完し、物語に躍動感を与える役割を果たす。伝達節は、話者を示すだけでなく、発話の口調や感情、態度を伝えることにより、読者が登場人物の発話をより臨場感を持って理解する手助けをする。

本研究では、14 冊の Wessex 小説を対象に独自のコーパスを構築し、まず伝達節を抽出した。その後、伝達動詞と副詞の頻度を分析し、さらに動詞と副詞の共起パターンを調査した。また、キャラクター別の分析を行い、ネットワーク可視化することで、主要登場人物における伝達動詞と副詞の使用傾向の違いを明確化し、それによって Hardy のキャラクターライゼーション手法の特徴を浮き彫りにすることを目指した。今後は他の作品との比較分析や感情分類を含むさらなる発展的研究が期待される。

キーワード 伝達節、動詞と副詞の共起、ネットワーク可視化、
キャラクターライゼーション

Reporting Clauses and Their Role in Characterization in Hardy's Wessex Novels

Cao Fanghui

Graduate School of Humanities, The University of Osaka

1-8 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka, 560-0043 Japan

Abstract This study focuses on the role of reporting clauses in the 19th-century Wessex novels of Thomas Hardy, aiming to clarify how they contribute to characterization. Dialogue in novels not only advances the plot but also serves as a key tool for expressing the personalities, emotions, and relationships of characters. In particular, reporting clauses—indicating the speaker and manner of speech—help convey nuances of tone, attitude, and emotion, allowing readers to grasp the atmosphere of the conversation beyond what is directly stated. By examining how Hardy uses these clauses, this study seeks to shed light on his distinctive techniques of characterization within the fictional world of Wessex.

To achieve this, a custom-built corpus of 14 Wessex novels was created. Reporting clauses were systematically extracted, and the frequencies of reporting verbs and adverbs were analyzed. The study then investigated co-occurrence patterns between verbs and adverbs, followed by a character-based analysis. Additionally, a network visualization was employed to clarify differences in the use of reporting verbs and adverbs across major characters, revealing distinctive stylistic tendencies. Through this multifaceted approach, the study highlights the linguistic strategies underpinning Hardy's character portrayals. Future directions include comparative analysis with other works and advanced sentiment analysis to deepen understanding of speech representation in literary texts.

Keywords Reporting Clauses, Verb-Adverb Co-occurrence, Network Visualization, Characterization

1. はじめに

小説における会話は、登場人物の性格や関係性を読者に伝える上で重要な役割を果たしている。特に長編小説では、地の文のみに頼った叙述は読者に負担を与える可能性があり、適度な対話の導入によって物語に活力がもたらされる。対話は物語の進行に寄与するだけでなく、登場人物の個性や心理状態を描写するための重要な手法である。Page (1973: 51) は、小説における対話 (dialogue) の重要性について次のように述べている。

The dialogue in a novel is [...] multifunctional: it can serve to further plot, to develop character, to describe setting or atmosphere, to present a moral argument or a discussion on cabbages or kings, or to perform any combination of these purposes.

会話部は小説の成り立ちにおいて重要な役割を果たしているが、会話部を抽出して分析することには技術的な制約が伴う。本稿では、こうした制約を克服し、量的な分析手法を用いることで、19世紀イギリスの作家 Thomas Hardy (1840-1928) の Wessex 小説における会話部に焦点を当て、特に「伝達節」と呼ばれる要素が人物描写に果たす役割を検討する。

1.1. 伝達節とは

伝達節 (Reporting Clause) とは、他者 (作家にとっての「他者」、すなわち小説の登場人物) の発言や思考を伝えるために用いられる節のことである。豊田他 (2017: 158) によれば、「文字だけでは話し手たちの表情や声の調子がわからず、朗読を収録した CD などの音源がない場合、会話の雰囲気をつかみにくいことがある。そのような会話に「表情」を与える役割を果たすのが伝達節である」という。伝達節とは、対話文中において話者や語り方を示す節であり、通常、話者、伝達動詞および副詞修飾語が含まれる。例えば、Wessex 小説から次のような例が挙げられる。

“I know hardly any poetry,” he replied mournfully. (*Jude the Obscure*, Part Fourth AT SHASTON, V)

ここで、“I know hardly any poetry” と引用符で囲まれた部分は *he* (Jude) の発言である。*he replied mournfully* が伝達節であり、*replied* が伝達動詞、*mournfully* が動詞を修飾する副詞で

ある。このように、伝達節は単に発話者を示すだけでなく、発話の口調、感情、態度を読者に伝える重要な役割を担う。Hardy が小説を創作する際、この部分でキャラクターの性格づけを行っていたと仮説を立てることができるだろう。本研究では、Wessex 小説における伝達節を対象に、伝達動詞とその動詞を修飾する副詞の結びつき、さらに伝達節とキャラクターライゼーション（人物の特徴づけ）との関連性について掘り下げていく。

1.2. Wessex 小説とは

Wessex 小説とは、作家 Hardy が創作した架空の地域「ウェセックス」を舞台とする小説群を指す。この地域は、Hardy の故郷ドーセット州を中心にイングランド南西部の田園地帯をモデルとしており、1871 年から 1897 年にかけて発表された 14 作品がこれに含まれる。Hardy の作品では、農村社会の階級、恋愛、宿命、産業化の影響などがテーマとして描かれ、登場人物の心理や関係性が精緻に描写されることが特徴である。また、叙述と対話が巧みに交錯し、地の文のみならず会話部分においても登場人物の個性や感情が色濃く表現される。特に伝達節においては、発話者の性格や心理が副詞の使用を通じて浮き彫りになることが多く、Hardy のキャラクターライゼーションの手法を考察する上で重要な分析対象となる。このような特徴を持つ Wessex 小説は、伝達節の機能や役割を検討する上で格好の分析対象となる。本研究では、これらの作品における伝達節の具体的な用法を分析し、その結果を通じて明らかになるキャラクターライゼーションの特徴を探究することを目指す。

2. 研究背景

2.1. 伝達節についての先行研究

伝達節は、物語中における発話や思考の提示において不可欠な構成要素である。典型的には *he said* や *she replied* のように発話の出所を示すが、その役割は単なる中継にとどまらない。Leech and Short (2007: 339–241) は、作家 T. F. Powys の短編物語 *The Bucket And The Rope* を分析し、the bucket と the rope の伝達節を比較した。その際、直接話法における伝達動詞の頻度を調査し、以下の表 (Table 1) のような結果を得ている (Leech and Short, 2007: 340)。その結果、bucket には *exclaimed* や *laughed* といった感情的な動詞が多く用いられているのに対し、rope にはそうした動詞は見られないことが指摘された。また、bucket は *remarked* や *observed* によって発話の開始者としての役割が強調され、rope は *continued* や *answered* を通じて応答的な役割を果たしていることが示された。こうした伝達節の使い分けは、bucket の衝動的かつ感情的な性格と、rope の慎重で理性的な性格との対比を際立たせ、物語におけるキャラクターライゼーションの形成に重要な役割を果たしている。

Table 1: DS reporting clause verbs (Leech and Short, 2007: 340)

| Verb | Bucket | Rope |
|-----------|--------|------|
| exclaimed | 2 | 0 |
| laughed | 1 | 0 |
| murmured | 1 | 0 |
| asked | 2 | 1 |
| remarked | 2 | 1 |
| observed | 4 | 2 |
| continued | 0 | 2 |
| said | 4 | 8 |
| answered | 0 | 2 |
| replied | 1 | 2 |
| reasoned | 1 | 0 |
| suggested | 1 | 0 |
| Total | 19 | 18 |

一方で, Semino and Short (2004) は, コーパスを用いて英語の書き言葉における発話提示パターンを包括的に分析し, 伝達動詞の使用傾向を明らかにした。当該コーパスは, 約 2,000 語のテキストサンプル 120 件 (総語数 258,348 語) から成り, 20 世紀後半の書き言葉の英国英語を対象としている。このコーパスは, プローズ・フィクション (Prose fiction : 87,709 語), 新聞報道 (Newspaper news reports : 83,603 語), 伝記・自伝 (Biography and autobiography : 87,036 語) の三つの主要ジャンルに分類され, 各ジャンルには 40 件のサンプルが含まれる。また, 附録には伝達動詞のアルファベット順リストが収録されており, それぞれの動詞がフィクション, 新聞記事, (自) 伝記という三つのジャンルで出現するかどうかを示されている。さらに各ジャンルは「serious (硬派)」と「popular (大衆向け)」に細分され, フィクションおよび (自) 伝記においては一人称・三人称ナレーションの別も考慮されている。Semino and Short (2004) の研究は, これらの分析を通じて, 英文学テキストにおける発話提示と伝達節の使用がキャラクタライゼーションや物語構造に及ぼす影響を明らかにし, 発話提示研究の基盤を築いた重要な先行研究と位置づけられる。

2.2. Wessex 小説のキャラクタライゼーションについての先行研究

Hardy の Wessex 小説群 (例 : *The Return of the Native*, *Tess of the d'Urbervilles*, *Jude the Obscure*) は, 架空の地方社会 Wessex を舞台とし, 自然と人間, 個人と社会, 宿命と自由意思といった対立を描出することで知られる。Windle (1906), Lea (1925), Hawkins (1983) などの研究は, 小説に描かれる世界と現実の Wessex 地域との対応関係に主眼を置いている。キャラクタライゼーションの分析においては, 心理描写や社会的役割の側面に重点を置いた研究が多く (例 : Weber, 1965), 叙述技法, とりわけ伝達節のようなミクロなレベルの言語資源が果たす役割は, これまでほとんど考察されてこなかった。従来の Hardy 研究では, 物語構造や主題分析が中心となり, 対話部分の言語的特徴に体系的に焦点を当てた研究は限定的であった。しかし, 登場人物の性格や関係性は, しばしば対話を通じて最も鮮明に示され

る。また、伝達節における動詞や副詞の選択は、読者の人物理解に直接影響を及ぼす可能性がある。

以上のような背景を踏まえ、本研究では従来の質的研究の蓄積を基盤としつつ、伝達節に注目した量的・質的な複合的分析を行うことで、Wessex 小説におけるキャラクター造形および語りの戦略の解明に新たな視座を提供することを目的とする。

3. 研究目的

本研究の目的は、Hardy の Wessex 小説における伝達節の使用実態を明らかにし、それが登場人物の性格描写にどのように寄与しているかを分析することである。具体的には、伝達節の有無、使用される伝達動詞や修飾副詞の種類、頻度、機能に着目し、Hardy の人物描写の手法を定量的かつ質的に解明する。

4. 研究方法

1871 年から 1897 年にかけて初版された 14 の Wessex 小説のプレーンテキストデータは、Project Gutenberg¹から入手した。伝達節とキャラクタライゼーションの関係を分析するにあたって、小説の本文そのものだけではデータとして扱いにくいいため、各登場人物の発話に対してそれぞれ注釈を加えた。対話部分の注釈付けは、Text Encoding Initiative (TEI) のガイドライン²に基づいたものである。具体的には、各発話について「話し手」、「聞き手」を筆者が小説の内容を詳細に読み込んだ上で判別し、TEI タグで記録した。会話データの正確性および判断基準の一貫性を担保するため、注釈は筆者自身が手作業で行い、ChatGPT をはじめとした AI ツールは一切使用しなかった。この過程は英語小説の精読、話者と聞き手の判断、タグの属性記入の繰り返しであり、長期間にわたる作業となった。

TEI タグを使用することで、小説の会話部を本文から明確に区別できるだけでなく、伝達節がどの人物の発話を修飾しているかという情報もデータとして抽出できる。このように、本研究で集めた TEI/XML ファイルは、小説会話部の分析において、価値のあるデータになったと考えられる。データを整えた後、Python スクリプトを用いて XML 解析を行い、データを抽出して量的分析を実施した。具体的には、それぞれの発話について話し手、聞き手、伝達動詞、および修飾副詞の有無を記録したデータとなった。

以下では、本研究のデータ作成および分析の各ステップについて述べる。まずは、14 冊の Wessex 小説のコーパスを構築する（第 5 節）。次に、伝達節の分析に焦点を当てる（第 6 節）。最初に、伝達節を抽出し、伝達動詞と副詞の頻度をそれぞれ分析する（第 6.1 節と第 6.2 節）。続いて、動詞と副詞の共起を調査し（第 6.3 節）、さらに、キャラクター別の分析を行う（第 6.4 節）。

¹ <https://gutenberg.org/>

² <https://tei-c.org/release/doc/tei-p5-doc/en/html/index.html>

5. コーパス構築

Table 2: 14 冊の Wessex 小説の統計データ

| | Year | Wessex Novels | Abbr. | Tokens | Types | TTR | STTR |
|----|------|-----------------------------------|-------|---------|--------|------|------|
| 1 | 1871 | <i>Desperate Remedies</i> | DR | 141,388 | 11,220 | 0.08 | 0.46 |
| 2 | 1872 | <i>Under the Greenwood Tree</i> | UtGT | 57,236 | 6,981 | 0.12 | 0.46 |
| 3 | 1873 | <i>A Pair of Blue Eyes</i> | PoBE | 130,745 | 11,328 | 0.09 | 0.46 |
| 4 | 1874 | <i>Far from the Madding Crowd</i> | FftMC | 137,802 | 12,041 | 0.09 | 0.45 |
| 5 | 1876 | <i>The Hand of Ethelberta</i> | HoE | 141,777 | 11,525 | 0.08 | 0.46 |
| 6 | 1878 | <i>The Return of the Native</i> | RotN | 142,151 | 10,769 | 0.08 | 0.44 |
| 7 | 1880 | <i>The Trumpet-Major</i> | TM | 113,626 | 10,054 | 0.09 | 0.46 |
| 8 | 1881 | <i>A Laodicean</i> | L | 138,846 | 11,427 | 0.08 | 0.46 |
| 9 | 1882 | <i>Two on a Tower</i> | ToaT | 94,254 | 9,373 | 0.10 | 0.46 |
| 10 | 1886 | <i>The Mayor of Casterbridge</i> | MoC | 116,321 | 10,781 | 0.09 | 0.45 |
| 11 | 1887 | <i>The Woodlanders</i> | W | 135,930 | 11,114 | 0.08 | 0.45 |
| 12 | 1891 | <i>Tess of the d'Urbervilles</i> | TotD | 149,685 | 12,862 | 0.09 | 0.45 |
| 13 | 1895 | <i>Jude the Obscure</i> | JtO | 145,238 | 11,355 | 0.08 | 0.44 |
| 14 | 1897 | <i>The Well-Beloved</i> | WB | 62,797 | 7,373 | 0.12 | 0.46 |

Table 2 は、本研究で構築したコーパスに含まれる Wessex 小説データの概要である。1871 年から 1897 年にかけて刊行された 14 作品を TEI 形式に準拠してタグ付けし、コーパスを構築した。「Year」の列は各小説の初版年を示している。また、「Abbr.」(Abbreviations: 略称)の列で示された小説の略称は、Hardy 研究において長年踏襲されてきたものである。「Tokens」(総語数)の列からわかるように、本コーパスに収録された作品の大半は 11 万語以上を有しており、最多は約 15 万語に達する。一方、最も短い作品は 1872 年刊行の *Under the Greenwood Tree* であり、約 6 万語である。これら 14 作品をすべて精読し、筆者自身が TEI に準拠してタグ付けを行ったものを、本研究のデータベースとした。「TTR」(Type-Token Ratio)と「STTR」(Standardized Type-Token Ratio)の列は小説語彙の多様性を示している。数値が大きければ、使用される語彙が豊富であり、作品の語彙密度が高いことを意味する。「TTR」は Type 数(異なり語数)と Token 数(総語数)の割合を示しており、作品の長さ(総語数)によって大きく左右されるため、作品間で語彙多様性を比較する際には、語数が揃っていない場合、その説得力が低下する。「Tokens」(総語数)で分かるように、長い作品と短い作品では、語数に約 3 倍の開きがあるため、ここでは参考値として提示するにとどめる。右端の「STTR」は、1000 語あたりの異なり語数を示しているが、すべての作品で 0.44~0.46 の範囲に収まっており、作品間で大きな差異は見られなかった。これより、Hardy の文体は語彙密度において一定の傾向を示しており、作品の長さに依存せず語彙使用が安定している可能性が示唆される。

6. 伝達節の分析

Table 3: Wessex 小説における登場人物の伝達節に使用される動詞と副詞（例）

| Novel | Speaker | Listener | Verb | Adverb |
|------------|----------------|----------------|-----------|--------------|
| 1871_DR | Cytherea | Owen | said | sadly |
| 1871_DR | Cytherea | Owen | – | – |
| 1871_DR | Owen | Cytherea | – | – |
| 1871_DR | Cytherea | Owen | – | – |
| 1871_DR | Owen | Cytherea | added | gloomily |
| 1871_DR | Owen | Cytherea | – | – |
| 1871_DR | Cytherea | Owen | – | – |
| 1871_DR | Owen | Cytherea | continued | – |
| 1871_DR | Owen | Cytherea | – | – |
| 1871_DR | Cytherea | Owen | said | firmly |
| 1872_UtGT | Mrs Dewy | Penny | – | – |
| 1872_UtGT | Penny | Mrs Dewy | – | – |
| 1872_UtGT | Mrs Dewy | Penny | – | – |
| 1872_UtGT | Penny | Mrs Dewy | – | – |
| 1872_UtGT | Mrs Dewy | Jimmy | inquired | – |
| 1873_PoBE | Robert | Stephen | – | – |
| 1873_PoBE | Stephen | Robert | repeated | mechanically |
| 1873_PoBE | Stephen | Robert | – | – |
| 1873_PoBE | Robert | Stephen | – | – |
| 1874_FftMC | Bathsheba | Gabriel | answered | – |
| 1874_FftMC | Bathsheba | Gabriel | – | – |
| 1874_FftMC | Gabriel | Bathsheba | murmured | – |
| 1876_HoE | Christopher | Ethelberta | resumed | cheerfully |
| 1876_HoE | Christopher | Ethelberta | – | – |
| 1876_HoE | Ethelberta | Christopher | – | – |
| 1876_HoE | Lady Petherwin | Ethelberta | said | – |
| 1876_HoE | Lady Petherwin | Ethelberta | – | – |
| 1876_HoE | Ethelberta | Lady Petherwin | exclaimed | innocently |
| 1876_HoE | Ethelberta | Lady Petherwin | – | – |

Table 3 は、Hardy の Wessex 小説から実際に抽出した伝達動詞とそれに付随する副詞の使用例を示したものである。表の各行には、話し手（「Speaker」）、聞き手（「Listener」）、使用された伝達動詞（「Verb」）、およびその動詞を修飾する副詞（「Adverb」）が記録されている。「Novel」の列には、それぞれの小説が「初版年_略称」の形式で記載されている。Wessex 小説は 14 作品あるが、対象とするすべての小説における対話ごとの伝達動詞および副詞の組み合わせを一つの表に網羅的に示すことは現実的ではないため、ここでは各作品からいくつかの例を抜粋し、代表的な事例として提示している。選定した例はできるだけ重複を避け、小説中で連続して現れる対話部分を優先的に取り上げた。このように一部のデータを組み合わせて表を作成することで、本研究におけるデータの構成や記録方法について具体的に示すことができる。なお、Table 3 は、全データの統計的傾向や頻度分布を示すものではなく、あくまで分析に用いるデータの形式や内容を説明するための一例である。

例えば、1871 年の *Desperate Remedies* (1871_DR) では、Cytherea が Owen に対して *said sadly*（悲しげに言った）、Owen が Cytherea に対して *added gloomily*（陰鬱に付け加えた）

「Verb」および「Adverb」欄が「-」で示されている場合は、該当する要素が明示されていない、すなわち、伝達節が使用されていないことを表している。小説の中では、すべての発話に対して逐一、発話者がどのように言ったかを伝達節で説明する必要はなく、しばしば引用符のみで人物 A と人物 B（場合によってはそれ以上）の会話が展開される。そのため、伝達動詞および副詞が明示されないケースはむしろ多い。伝達節が挿入されていない場合でも、改行によって発話者が変わったことが示されるため、必ずしも話者を都度明記する必要がない。このため、「Verb」および「Adverb」が「-」（空欄）となる箇所が小説内に多く存在する。この点については、小説を読んだ経験のある読者にとっては理解しやすいであろう。本研究では、上記のデータを用いて、Hardy の Wessex 小説に潜在するパターンを探っていく。

| Verbs | Frequency |
|-----------|-----------|
| said | 4300 |
| continued | 350 |
| replied | 250 |
| cried | 200 |
| murmured | 150 |
| answered | 150 |
| added | 150 |
| exclaimed | 150 |
| asked | 100 |
| whispered | 100 |
| returned | 100 |
| resumed | 100 |
| observed | 100 |
| remarked | 50 |
| repeated | 50 |
| thought | 50 |
| inquired | 50 |
| pleaded | 50 |
| rejoined | 50 |
| spoke | 50 |



Fig. 2: 動詞の頻度ワードクラウド
(全語対象)

Fig. 1 に示す棒グラフは、上位 20 の伝達動詞の出現頻度を示している。最も多く使用されているのは *said*（言う³）という発話を示す基本的な動詞であり、圧倒的に多いことがわかる。次いで *continued*, *replied*, *cried* などの動詞がよく使われていることが確認できる。*continued*（続ける）は会話が継続する場面で、*replied*（返答する）は受け答えの際、*cried*（叫ぶ・泣き叫ぶ）は感情的な発話の際に多用される。これらの動詞は、登場人物の会話の流れや感情表現において重要な役割を果たしていることがわかる。

76

Fig. 2 は、伝達動詞の頻度に応じて単語の大きさを変えて可視化したものである。Fig. 2 のワードクラウドも、各単語の出現頻度に基づいて作成されているため、Fig. 1 と同様の傾向が見て取れる。特に、*said* が最も目立つ形で表示されており、頻出していることが視覚的にわかる。また、*murmured* (つぶやく)、*whispered* (ささやく)、*exclaimed* (感嘆する) など、発話の強弱や感情の込め方を示す動詞が多く含まれていることが特徴である。小説においては、単に「話す」だけでなく、どのように話しているのか(感情・口調)を伝える表現が多様に使用されていることがわかる。Fig. 1 とは異なり、Fig. 2 では、この 14 作品中に登場する全ての伝達動詞が表示されている。上位 20 語は大きめの文字で示されているが、それ以外の動詞もすべて頻度に応じて配置されており、合計 101 語が含まれている。ここから、Wessex 小説における伝達動詞の多様性、ひいては Hardy の語彙の豊富さを窺い知ることができる。

6.2. 伝達動詞を修飾する副詞の頻度分析

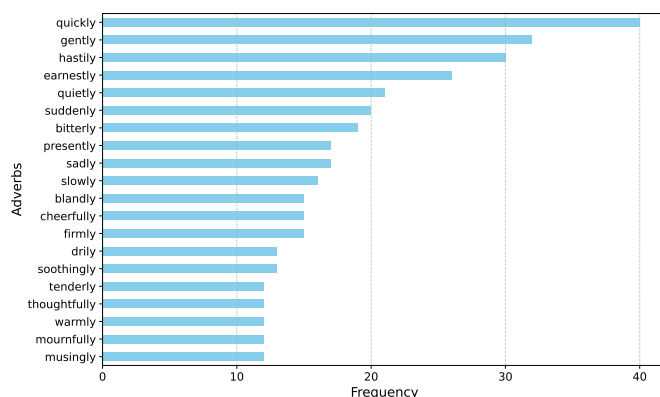


Fig. 3: 副詞の使用頻度ランキング (上位 20 語)



Fig. 4: 副詞の頻度ワードクラウド (全語対象)

次に、伝達節における副詞修飾の使用について検討する。このセクションでは、発話に用いられる伝達動詞を修飾する副詞の使用頻度を分析する。Fig. 3 は、最も頻繁に使用される副詞の上位 20 語を示したもので、Fig. 4 は、全体の副詞の使用傾向を視覚的に表したワードクラウドである。

まず、Fig. 3 の「副詞の使用頻度ランキング (上位 20 語)」を見てみよう。横軸 (Frequency) から分かるように、頻度が 40 回を超える副詞は存在せず、Fig. 1 に示される動詞に比べ、伝達節において同じ副詞が繰り返し使用される回数は少ないことがわかる。なお、副詞が実際に伝達動詞を修飾しているかどうかは、本文中の各用例を一つひとつ確認した上で集計を行ったため、結果の精度は高いと言える。副詞の種類は合計 308 語に及び、そのうち頻度 1 のものが 165 語と半数以上を占めていた。頻度上位の副詞としては、*quickly* (素早く) や *gently* (優しく)、*hastily* (急いで)、*earnestly* (真剣に)、*quietly* (静かに)、*suddenly* (突然) などが挙げられる。これらは、登場人物の発話の速さや口調、話し手の感情やトーンを繊細に表現する役割を果たしていると考えられる。

次に、Fig. 4 のワードクラウドに注目する。頻出する副詞ほど大きく表示されており、全体的な使用傾向を視覚的に把握できる。ここでも、*quickly*, *gently*, *hastily* といった副詞が目立ち、さらに、*warmly* (温かく), *blandly* (淡々と), *cheerfully* (陽気に) といった感情を強調する副詞の多さが確認できる。このワードクラウドには、合計 308 語の副詞がすべて含まれており、特に *-ly* で終わる副詞や比較的長い語、難解で文学的な語彙が多く含まれている点は注目に値する。

この分析から、登場人物の発話には、伝達動詞とともに様々な副詞が組み合わせられることで、感情や話し方のニュアンスが豊かに表現されていることが明らかとなった。特に、話し手の感情や発話の速度・強さを表す副詞が頻繁に用いられていることが顕著である。

6.3. 副詞修飾の共起分析

このセクションでは、伝達動詞と副詞修飾の共起分析 (Collocation Analysis) について説明する。ここの「共起」は、Wessex 小説において登場人物が発話する際に使用される伝達動詞と、それを修飾する副詞の「組み合わせ」のことである。小説内の発話伝達節において、特定の動詞と副詞がどのように共起するのかを明らかにすることで、登場人物の発話パターンの特徴を把握することを目的としている。

Fig. 5 は、Wessex 小説の伝達節における動詞-副詞の共起を示したバブルチャート (動詞と副詞はそれぞれ上位 20 語⁴) である。バブルチャート (Bubble Chart) とは、データの関係性を視覚的に表現する散布図 (Scatter Plot) の一種である。通常の散布図 (点を使ってデータを示す) とは異なり、データの頻度や重要度をバブルの大きさと色で表現する。このチャートでは、縦軸に伝達動詞を修飾する副詞 (Adverb)、横軸に登場人物の発話に使われる伝達動詞 (Verb) を配置し、それぞれの組み合わせの頻度をバブル (円) の大きさと色で表している。円が大きいほど、その動詞と副詞の組み合わせが頻繁に登場することを意味する。色も頻度を示しており、頻度が高いほど赤く、低いほど青く表示される。

バブルチャートを用いることで、登場人物の発話がどのような動詞と副詞の組み合わせで表現されるかを一目で把握できる。特定の動詞がどのような感情や話し方のニュアンスとともに使われているかを視覚的に捉えるのに適した分析方法である。

⁴ 本研究で使用したデータには、伝達動詞が合計 101 語、副詞が 308 語含まれている。すべてのペアの共起関係を視覚化すると視認性が低下するため、図の可読性を確保する目的で、頻度の高い順に、伝達節に現れる伝達動詞上位 20 語と、それを修飾する副詞上位 20 語を可視化の対象とした。

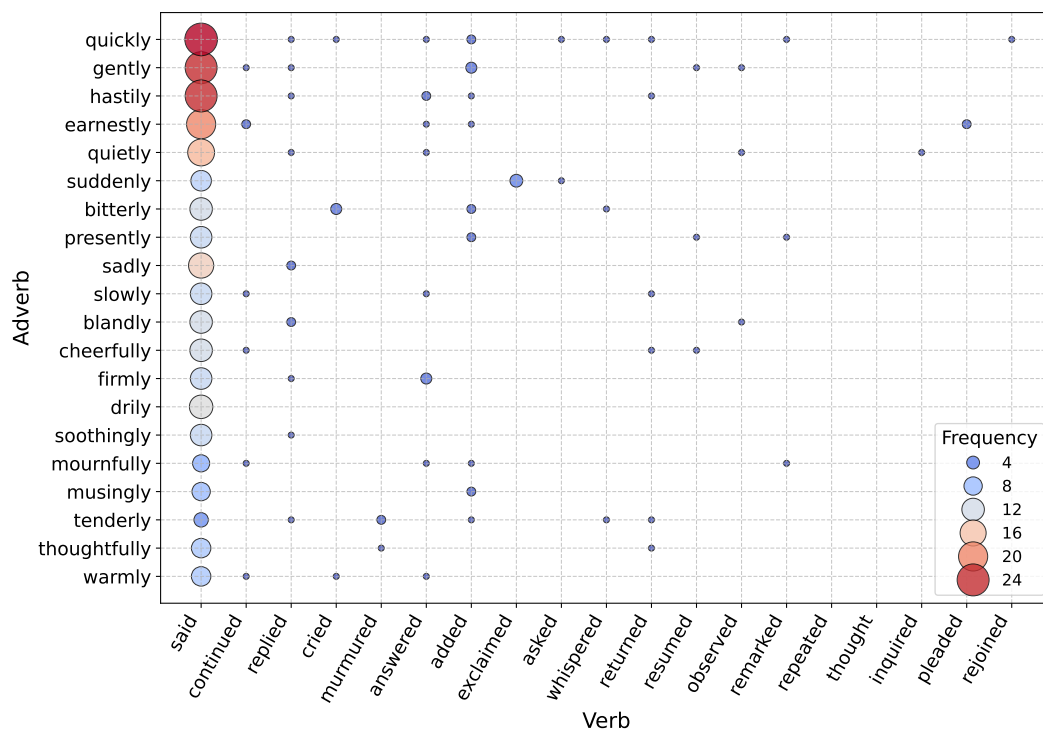


Fig. 5: 動詞-副詞共起バブルチャート（上位 20 語）

バブルチャート（Fig. 5）から、いくつかの興味深いパターンが確認できる。まず、*said*（言う）という動詞は、最も多くの副詞（頻度上位 20 の副詞全て）と共起しており、特に *quickly*（素早く）：25 回、*gently*（優しく）：24 回、*hastily*（急いで）：24 回、などが頻繁に使われている。これは、一般的な発話動詞として *said* が多様な発話状況を表現するために広く使用されていることが要因と考えられる。

一方で、*continued*（続ける）、*replied*（返答する）、*answered*（答える）、*added*（付け加える）などの発話の流れを示す動詞は、*earnestly*（真剣に）、*saidly*（悲しげに）、*blandly*（淡々と）、*firmly*（しっかりと）、*gently*（優しく）といった態度や感情を補足する副詞と共起しており、会話のトーンや意図を明確にするために使われている。

また、*cried*（叫ぶ・泣き叫ぶ）、*exclaimed*（感嘆する）など感情表出の強い動詞は、*bitterly*（激しく・苦々しく）、*suddenly*（突然）といった感情の激しさや突発性を表す副詞とよく共起する。これは、感情の強度を強調する意図があると考えられる。

さらに、*murmured*（つぶやく）、*whispered*（ささやく）など似たようなイメージを持つ静かな発話動詞は、このチャートから、それぞれ使い方のパターンが見られる。前者は *thoughtfully*（思慮深く）と共起し、控えめな感情や内省的な態度を表現する役割がある。後者は *bitterly*（激しく・苦々しく）、*quickly*（素早く）と共起しており、抑えきれない感情や緊張感を伴う場面を表している。

他にも、伝達動詞自体の特徴が窺える。例えば、*observed*（指摘する）は、*gently*（優しく）、*quietly*（静かに）、*blandly*（淡々と）と共起し、客観的または冷静な態度を伝えること

が多い。このように、動詞と副詞の共起パターンから、各動詞がどのようなトーンや感情とともに用いられているのかが読み取れる。これにより、小説の中で特定の伝達動詞がどのようなニュアンスを持って使われているのかが浮かび上がった。

この共起分析から、登場人物の発話には、特定の動詞と副詞の組み合わせがある程度決まっていることが分かった。特に、話し手の感情や発話の強弱を表現するために、副詞が効果的に使われていることが確認された。

6.4. 人物別の伝達節分析（事例分析）－ *Tess of the d'Urbervilles* を例に－

次に、主要登場人物と伝達動詞の関係について説明する。このセクションでは、代表作 *Tess of the d'Urbervilles* を例に、小説に登場する主要人物の発話に用いられる伝達動詞の種類を分析する。登場人物ごとに、どのような伝達動詞が使われているかを視覚化することで、それぞれのキャラクターの発話スタイルや特徴を明らかにすることを目的とする。

Fig. 6 は、主要登場人物である「Tess」、「Angel」、「Alec」の3人を対象に、発話時に使用される伝達動詞のネットワークを示している。この図では、3人の発話に使われる伝達動詞を、それぞれ異なる色で分類している。Tess は赤、Angel は青、Alec は黄色で示され、複数の人物に共通する動詞は混合色（グレーなど）で表示される。また、ノードの大きさは、各キャラクターがその動詞をどの程度使用したかを示している。ネットワークの中心部にある動詞を除き、周辺に配置されている動詞のノードサイズはほぼ同じである。これは、多くの動詞が一度しか使用されていないためである。このネットワークは頻度差よりも、登場人物と伝達動詞の結びつきを可視化するのに役立つ。

この3人が発話の際に実際に使用した伝達動詞の種類とその頻度は、Table 4 にまとめている。頻度から見ると、女性主人公である Tess の発話には、作家 Hardy がより多様な伝達動詞を用いていることがわかる。女性主人公の心理を男性主人公よりも繊細に描写していることは、Hardy 作品における「フェミニズム」の主題が反映されていると言える。

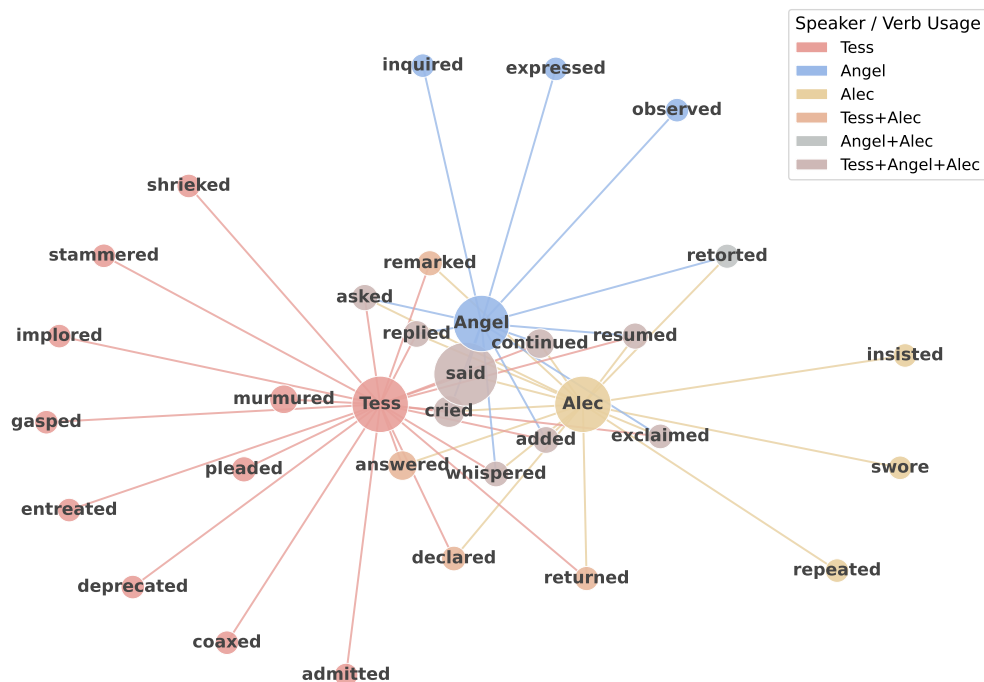


Fig. 6: 主要登場人物と伝達動詞のネットワーク可視化

Table 4: Tess, Angel, Alec と伝達動詞

| Tess | | | Angel | | | Alec | | | | | |
|------|------------|-----------|-------|-----|-----------|----------|-------|-----|-----------|----------|-------|
| No. | Verb | Japanese | Count | No. | Verb | Japanese | Count | No. | Verb | Japanese | Count |
| 1 | said | 言う | 51 | 1 | said | 言う | 60 | 1 | said | 言う | 23 |
| 2 | cried | 叫ぶ・泣き叫ぶ | 12 | 2 | continued | 続ける | 5 | 2 | continued | 続ける | 5 |
| 3 | answered | 答える | 11 | 3 | cried | 叫ぶ・泣き叫ぶ | 3 | 3 | resumed | 再開する | 4 |
| 4 | murmured | つぶやく | 11 | 4 | added | 付け加える | 2 | 4 | added | 付け加える | 3 |
| 5 | pleaded | 懇願する | 4 | 5 | asked | 尋ねる | 2 | 5 | cried | 叫ぶ・泣き叫ぶ | 3 |
| 6 | replied | 返答する | 4 | 6 | whispered | ささやく | 2 | 6 | answered | 答える | 2 |
| 7 | asked | 尋ねる | 3 | 7 | exclaimed | 感嘆する | 1 | 7 | replied | 返答する | 2 |
| 8 | continued | 続ける | 3 | 8 | expressed | 表現する | 1 | 8 | asked | 尋ねる | 1 |
| 9 | remarked | 述べる | 3 | 9 | inquired | 尋ねる | 1 | 9 | declared | 宣言する | 1 |
| 10 | added | 付け加える | 2 | 10 | observed | 指摘する | 1 | 10 | exclaimed | 感嘆する | 1 |
| 11 | declared | 宣言する | 2 | 11 | replied | 返答する | 1 | 11 | insisted | 強く主張する | 1 |
| 12 | whispered | ささやく | 2 | 12 | resumed | 再開する | 1 | 12 | remarked | 述べる | 1 |
| 13 | admitted | 認める | 1 | 13 | retorted | 言い返す | 1 | 13 | repeated | 繰り返す | 1 |
| 14 | coaxed | なだめる | 1 | | | | | 14 | retorted | 言い返す | 1 |
| 15 | deprecated | 非難する | 1 | | | | | 15 | returned | 返す | 1 |
| 16 | entreated | 懇願する | 1 | | | | | 16 | swore | ののしる | 1 |
| 17 | exclaimed | 感嘆する | 1 | | | | | 17 | whispered | ささやく | 1 |
| 18 | gasped | はっと息を呑む | 1 | | | | | | | | |
| 19 | implored | 嘆願する | 1 | | | | | | | | |
| 20 | resumed | 再開する | 1 | | | | | | | | |
| 21 | returned | 返す | 1 | | | | | | | | |
| 22 | shrieked | 金切り声を上げる | 1 | | | | | | | | |
| 23 | stammered | 口ごもりながら言う | 1 | | | | | | | | |

ここからは、ネットワーク図 (Fig. 6) と頻度表 (Table 4) を参照しながら、人物別の伝

達節分析をさらに詳細に行い、各登場人物の発話における伝達動詞の使用傾向について説明する。ただし、*said* (言う)、*cried* (叫ぶ・泣き叫ぶ)、*answered* (答える)、*replied* (返答する)、*asked* (尋ねる)、*continued* (続ける) などの基本的な伝達動詞は、主要人物・脇役を問わず、キャラクター全員に共通して使われているため、ここではこれらを特別に検討しないこととする。その代わりに、3人それぞれに特徴的な動詞に着目する。

まず、女性主人公 Tess が独自に使用する動詞には、「懇願」や「感情的な発話」に関するものが多く含まれている。具体的には、*pleaded* (懇願する)、*entreated* (懇願する)、*implored* (嘆願する) などの切実な訴えを表す動詞、*gasped* (はっと息を呑む)、*shrieked* (金切り声を上げる)、*stammered* (口ごもりながら言う) などの強い感情や驚きを表す動詞、さらに *murmured* (つぶやく) といった静かな発話を表す動詞や、*coaxed* (なだめる)、*deprecated* (非難する) といった感情的な発話に関連する動詞が多く確認される。これにより、Tess が物語の中で困難な状況に直面し、しばしば強い感情を伴って発話し、苦境に立たされていることが示唆される。

一方、男性主人公の一人である Angel は、「知的で冷静な発話」が多い。*expressed* (表現する)、*observed* (観察する)、*inquired* (尋ねる) といった、客観的・理性的な発話を示す動詞が多く使用されている。これは、Angel の発話が比較的冷静かつ理知的であることを反映していると考えられる。しかし、彼も時には感情を露わにする場面がある。Tess に比べるとその頻度は低いが、*cried* (叫ぶ・泣き叫ぶ) といった感情的な発話も確認できる。また、*retorted* (言い返す) も1回使用され、議論や対立的な場面が一部含まれていることが分かる。このように、Angel は普段は冷静に発話するが、特定の状況では感情を表出する一面も持つことが読み取れる。

もう一人の男性主人公である Alec は、「自己主張的で強制的・支配的な発話」が多い傾向にある。*insisted* (強く主張する)、*repeated* (繰り返す) などの動詞が使われており、Alec が相手に対して自己の意見を強く押し付ける傾向がうかがえる。また、*swore* (罵る⁵) が含まれており、攻撃的または支配的な発話を行うことが示されている。さらに、*retorted* (言い返す) も Alec の発話に使われており、対立的な場面があることがわかる。このように、Alec の発話における伝達動詞の分析から、彼のキャラクターが自己主張が強く、相手に対して自分の意見を押し付けたり、時には感情的かつ支配的な対話を行うことが明らかとなった。

分析の結果をより明確に整理すると、以下のような結論が導き出される。Tess は感情的な発話が多く、懇願や嘆願を表す動詞が伝達節に頻繁に用いられている。Angel は冷静かつ知的な発話が中心で、観察や質問に関する伝達動詞が多く使用される。一方、Alec は自己主張が強く、攻撃的・支配的な発話が特徴的である。実際に小説を読んだ読者にとって、これら三人の性格は、使用される伝達動詞から浮かび上がるイメージと一致するのではないだろうか。このことから、伝達動詞が小説におけるキャラクター描写において、いかに重要な役割を果たしているかが、ここから読み取れる。

⁵ “Now, damn it—I’ll break both our necks!” *swore* her capriciously passionate companion. “So you can go from your word like that, you young witch, can you?” (*Tess of the d’Urbervilles*, Phase the First: The Maiden, VIII) これは、Alec (*her capriciously passionate companion*) が Tess に対する発話で彼女を罵った場面である。*swore* という語は「誓う」という意味もあるが、ここでは「罵る」の意味に当てはまる。この伝達動詞によって、Alec の性格の悪さが読者に印象づけられる。

7. まとめと今後の課題

本研究では、Wessex 小説における登場人物の発話に用いられる伝達動詞と副詞の分析を行い、以下のような重要な知見を得た。

まず、Wessex 小説における伝達動詞および副詞の種類（多様性）が明らかとなり、作家 Hardy がキャラクターの発話時における心理描写において、繊細かつ力強い表現力、ならびに豊富な語彙力を有していることが示された。また、伝達動詞と副詞の組み合わせを分析することで、登場人物の感情や話し方のニュアンスがどのように表現されているかを明らかにした。例えば、*cried* は *bitterly*, *exclaimed* は *suddenly* といった副詞と共に起することが多く、感情表出の強い動詞は感情の激しさや突発性を示す副詞と頻繁に組み合わせられることが確認された。一方で、感情的により中立的な *observed* は、*gently*, *quietly*, *blandly* など、客観的または冷静な態度を表す副詞と共に起する傾向が強い。これにより、登場人物の発話の特徴が、伝達節における副詞によって効果的に反映されていることも確認された。さらに、登場人物ごとの伝達動詞の使用傾向には明確な違いがあり、キャラクターの性格や関係性が発話スタイルに反映されていることが明らかとなった。特に、Tess は感情的な発話が多く、Angel は知的・冷静な発話が中心であり、Alec は強制的・支配的な発話が多いことが分かった。このように、伝達動詞の選択を通じて、登場人物の性格や発話スタイルが的確に描写されていることが示された。

本研究では、伝達動詞と副詞の分析を通じて登場人物の発話パターンを明らかにしたが、今後のさらなる発展に向けて、以下の課題が考えられる。(1) 他の小説との比較分析：本研究では、代表作 *Tess of the d'Urbervilles* を中心に分析を行ったが、他の Wessex 小説にも同様の傾向が見られるかどうかを比較分析することで、作家の文体や作品ごとの発話パターンの違いを明らかにする必要がある。(2) より詳細な感情分析：伝達動詞と副詞の組み合わせだけでなく、文脈を考慮した感情分析（ポジティブ・ネガティブの分類など）を行うことで、登場人物の発話における感情的な変化をより詳細に捉えることができる。(3) 登場人物の関係性と発話の関連性：登場人物同士の関係（敵対・恋愛・友情など）が発話スタイルにどのように影響を与えているのかを分析することで、物語の構造をより深く理解することが可能となる。(4) 時間的変化の分析：物語の進行に伴い、登場人物の発話スタイルがどのように変化するかを調査することで、キャラクターの成長や心理的变化をより明確に把握できる。

以上のように、本研究では、小説における発話表現を定量的に分析し、登場人物の性格や物語の展開がどのように言語的に表現されているかを明らかにした。今後は、他作品との比較や、より高度な感情分析を進めることで、文学作品の発話表現に関するさらなる洞察を得ることが期待される。

Bibliography

- [1] Hardy, T. (1992). *Far from the Madding Crowd*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 13 March 2023.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/27/pg27-images.html>

- [2] Hardy, T. (1994). *Jude the Obscure*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 13 March 2023.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/153/pg153-images.html>
- [3] Hardy, T. (1994). *Tess of the d'Urbervilles: A Pure Woman*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 26 May 2022.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/110/pg110-images.html>
- [4] Hardy, T. (1996). *The Woodlanders*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 13 March 2023.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/482/pg482-images.html>
- [5] Hardy, T. (2001). *The Trumpet-Major*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 13 March 2023.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/2864/pg2864-images.html>
- [6] Hardy, T. (2001). *Under the Greenwood Tree*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 13 March 2023.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/2662/pg2662-images.html>
- [7] Hardy, T. (2002). *The Hand of Ethelberta*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 13 March 2023.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/3469/pg3469-images.html>
- [8] Hardy, T. (2002). *Two on a Tower*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 13 March 2023.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/3146/pg3146-images.html>
- [9] Hardy, T. (2006). *The Mayor of Casterbridge*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 13 March 2023.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/143/pg143-images.html>
- [10] Hardy, T. (2006). *The Return of the Native*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 13 March 2023.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/122/pg122-images.html>
- [11] Hardy, T. (2008). *A Pair of Blue Eyes*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 13 March 2023.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/224/pg224-images.html>
- [12] Hardy, T. (2009). *A Laodicean*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 13 March 2023.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/3258/pg3258-images.html>
- [13] Hardy, T. (2009). *Desperate Remedies*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 13 March 2023.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/3044/pg3044-images.html>
- [14] Hardy, T. (2009). *The Well-Beloved*. Project Gutenberg. Online resource. (Last accessed 13 March 2023.) Available online at <https://www.gutenberg.org/cache/epub/3326/pg3326-images.html>
- [15] Hawkins, D. (1983). *Hardy's Wessex*. Macmillan.
- [16] Lea, H. (1925). *Thomas Hardy's Wessex* (Pocket ed). Macmillan.
- [17] Leech, G. and Short, M. (2007). *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*, Second edition. Pearson Longman.
- [18] Page, N. (1973). *Speech in the English Novel*. London: Longman.
- [19] Semino, E., and Short, M. (2004). *Corpus Stylistics: Speech, Writing and Thought Presentation in a Corpus of English Writing*. Routledge.
- [20] Tabata, T. (2004). Differentiation of Idiolects in Fictional Discourse: A Stylo-Statistical Approach to Dickens's Artistry. In Hiltunen, R. and Watanabe, S. (Eds.), *Approaches to Style and Discourse in English*. Osaka: Osaka University Press, pp. 79 – 106.
- [21] Weber, C. J. (1965). *Hardy of Wessex: His Life and Literary Career*. New York: Columbia University Press.
- [22] Windle, B. C. A. S. (1906). *The Wessex of Thomas Hardy*. J. Lane, Bodley Head.
- [23] 曹芳慧. (2023). *Tess of the d'Urbervilles* の会話部によるキャラクターライゼーション. 言語文化共同研究プロジェクト『テキストマイニングとデジタルヒューマニティーズ 2022』(大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻), 2023, pp. 59–78.
- [24] 豊田昌倫, 堀正広, 今林修. (2017). 『英語のスタイル—教えるための文体論入門』. 東京: 研究社.